

薬学部生からみた放射線教育への認識と現状

○武田 直仁<sup>1</sup>, 高橋 郁子<sup>1</sup>, 平松 正行<sup>1</sup>, 永松 正<sup>1</sup>, 西田 幹夫<sup>1</sup>(<sup>1</sup>名城大薬)

【目的】東日本大震災を機に放射線・放射能に関する国民の意識は一変した。大学入学前に放射線に関わるどのような教育を受け、どのような意識を持っていたのかを本学薬学生と家政学部・栄養学科生に質問紙票による比較調査を行い、薬学教育のなかで医療人が担うべき役割を調べた。

【方法】調査は震災前の2008年と震災後の2011年に延べ600名の2・3年次学生に実施した。

【結果及び考察】薬学部生群も栄養学科生群も出身高校の所在地、コース、区分、中学・高校までに学んだ教育内容について有意な差はなかった。教育内容については、「何も学んでいない」と答えた度数は約半数に挙げた。『薬剤師が放射線医薬品の管理など専門知識を有する人として法律上位置づけられていることを知っているか』についての質問では、栄養学科生では17%、震災前薬学生では26%が知っていると答えたが、震災後調査では薬学生は54—65%に増加した。また、『放射線に関する不安や心配事が生じた際の相談先』についての質問では薬学生・栄養学科生群とも、医師を第一に挙げ次いで役所、大学が続き、薬剤師を相談先に答えた度数は上位5番目の下位であった。両群間で有意な差が認められた質問は『放射線に関する科目を今後も、履修したいか』であった。栄養学科生は25%が受講すると答えたが、薬学生では79—87%が受講すると答え、この比率は震災後の調査でも変わらなかった。『将来、薬剤師として放射線に関する業務を受け入れるか』については、薬学生では76%が肯定的回答をしており、薬学生は震災に関らず放射線に関する知識・技能の習得を医療人として必要であると認識しており、興味・関心を維持していることが判明した。